

軍医が引つ張って正常な位置に直して、女軍医中尉がしっかりと丁寧に包帯石膏を十一本も巻いてくれた。

今度は最初のときと違って石膏が乾燥した後、松葉杖で突いて歩けるようになった。

石膏を巻いて三十三日の朝、女軍医中尉に呼び出されて、ヤボンスキー杖なしに歩いてみよと言われて歩いた。まだ少し痛いといったが、ハラシヨウハラシヨウ、イッシヨ東京ダモイだと言われた。石膏を切ってもらったが足がブラブラして歩けない。一本杖で練習して歩くようにと言われた。

五日目に貨車がきたので、翌朝出発はトラックで車送りとなった。貨車に着いて、乗車には地上七、八尺もあるのではしごで後ろ向きになりお尻と左足で、一けた一けた上って乗車した。

四日目にナホトカに着き、病院船帰国となり、待機していた。なかなか船が来ないので、一般船に切り替わり第三分所を通って港まで車送りとなって、一人ずつ点呼をして乗船した。遠州丸の甲板上に立ったときは万感こもこも胸迫る思いであった。

顧みれば、終戦後シベリアに連行されてさまざまな苦難を味わったが、不思議に命を長らえて、しっかりと故国の大地を歩みしめて故郷へ帰り、親、妻子のもとに帰れた感激は、今も忘れない。

抑留生活回顧

北海道 奈良勝正

昭和二十年十月二十六日、昼近く我々の乗った船は、ソ連兵が北海道とだました沿海州ワニノ港に接岸した。あたりの山は見渡す限り焼け野原で、焼けばくいが点在していた。ソ連兵いわく、戦前に無人に近いこの地に日本人が船でやって来、盗伐の限りを欲しいままにして、あとは証拠隠滅に火を放ったと話していた。海はフヨールド状を形成しかなり水深があり、ここは潜水艦の基地でもあろうか、車のエンジン音に似た音を発し、潜水艦が数隻航行していた。丘の上ではダイナマイトの破裂音がし、数人作業しているのが遠

望された。それが接岸して見るとドイツ兵の捕虜であることがわかり、驚いた。

シベリアは既に一面雪に覆われ真冬の状態で、翌二十一年二月まで風呂にも入れず、体はあかまみにシラミ、南京虫に悩まされ、生存線ギリギリの食糧で、氷点下三十度以下の外気にさらされての労作業で体力も消耗し、栄養失調で、夜小用に起き目が見えなくなつたと言いながら、糞、小便を漏らし、息絶えた戦友も続出し、朝寝台で眠るがごとくに死んでいる友もあり、まさに生き地獄であり、私の推測では、春を迎えるまでに抑留人員の二割は死亡したと思います。六月遅い春の訪れとともに移動が始まり、奥地へ奥地へと西進し、冬季は森林伐採、春は鉄道、道路作業、建築、屋根まさふき、コルホーズ作業に狩り出され、入ソ地より三百キロ西方アムールの大河を船で渡りコムソモリスク市に到着した。ここで初めて電灯のある収容所に入り、作業も軽作業に変わり、コルホーズの除草や背丈ほどもある牧草刈りで、一メートルもある大かまで腕がだるくなるほどの作業で、移動の都度最終集結

地ナホトカを目指して南下しており、また三年もロシアにしていると露語もわかるようになり、ある日、駅のラジオからヤボンスキースコラーダモイ（日本兵は近々帰す）と聞き小躍りして喜んだ。

シベリア抑留の思い出（その1）

昭和二十年十月、沿海州ソフガワニ港入ソ以来、同二十二年九月まで収容所移動は、四十五年も過去のこととで、忘却して終わつたが、ソフガワニ、ムーリン、トモニー、オモニー、コムソムモリスク、ハバロフスク等十二か所余りあり、作業も鉄道工事、道路、建築、伐採、コルホーズ等多様にわたり、これにまつわるいろいろな思い出がある。冬季のダイナマイトの穴掘り作業は、凍土に直径三十センチ深さ一メートルの穴を三個掘ればいつ帰ってもよいと監視兵の言葉を聞き、寒さも忘れ氷のように冷たい鉄棒の冷たさも忘れ、夢中で掘り上げて、三時ごろ収容所に帰り、しばらくたつと右手の手指と中指がろうそくのように真っ白にはれ上がり凍傷にかかり、そのお陰で二週間休息ができたこと。今でも私の指には手術の跡が残り、指紋は

消えている。

極度の食糧不足でカエルや、モグラ、バッタ、野草等食べて急場をしのぎ、中には、毒草を知らずに食べ腹痛を起こし、真っ黒な汚物を吐きながら死んでいった友もあった。

コムソムモリスク市内で道路作業中に通行中のロシア婦人の小脇に抱えた黒パンを見た私は、ニムノーチカ、ダワイ（少し下さい）と話しかけたところ、三キロパンを無造作にちぎりと与えてくれた。かわいそうにと思ったのか、我が子がドイツ戦線で戦死でもしたのだろうか、食糧不足の中ひとつかみのパンであったが、その感激は今でも忘れることはできない。これも同市で作業中、ソ連服装の日本人が近づきいわく、私はノモンハンでソ連軍の捕虜になり現在ロシア人と結婚し市民権もあり、祖国に帰りたいのだが靖国神社に祭られている体であるので、帰国はできぬ。あなたたちは帰れるのにと、涙を流していた。これも戦争のなせる悲しい思い出であった。

シベリア抑留の思い出（その2）

我々捕虜の移動は毎月決まったように二、三日あり、中央からの指令が経路を通って流れているようだ。移動はバム鉄道を貨車にて大体三、四日の行程で、その間食糧は前渡しで、黒パン、塩蔵ニシン等が主で、通過駅でスープの補給がある。用便は備えつけのビヤダるを使用していた。

前渡しの食糧も空腹の毎日なので、満足感を味わうため二、三日で全部食べ、後は水ばかり飲んでいたような状態であった。たまたま食糧を飯盒に入れて車窓に下げると、交差する囚人（ロシア人）列車から伸ばした手で盗まれることもあり、いかにシベリア全域が飢餓状態がうかがわれた。三年間抑留されたがその間米を食べたのはわずか二か月ほどで、あとは馬と同様、エン麦、そば、大豆、アワ、コウリヤン、ヒエが主で、スープはやせたヤギ二頭を五百人に給与するため、おで骨ごとみじんに碎き、それに皮ごとの小さな馬鈴薯が少量入ったもので、穀類はカーシヤ（かゆ）が飯盒のふたすれすれにあるだけで、腹の足しにもならず、労働のノルマがあり、極寒マイナス三十度

以下の中での作業の苦痛、また収容所に帰ってからは、夜は南京虫、シラミの総攻撃で熟睡もできずに衰弱の一途をたどり、ソ連政府も心配して、シラミ、南京虫が一匹もなくなるまで作業は中止と厳命があり、滅菌、熱処理、入浴で一週間後には駆除もでき、作業が開始された。町での作業中は、監視兵の目を盗み、ちり箱をあさり、不器用なロシア人のむいた馬鈴薯の皮は厚く、それを拾い集めスコップに乗せてたき火で焼いて食べたり、また夜間作業中に、引込線に入った貨車から凍結したひざ株大のキャベツを盗み、かじりつきその味は丁度アイスクリームのようにおいしかったことは、今でも忘れない。

二、三か月ごとに貨車、トラックで移動があり、アムールの大河を船で渡り、奥地へ奥地へと西進し、収容所が変わる都度作業も変わり、夏場は刃渡り一メートルほどの鎌で草刈り作業で、バサツ、バサツと刈り倒し、二十分も経過すると、三十度を超す暑さの上、空気が乾燥しており、先に刈り取り分は乾燥しており、三トンほどの山に積み上げ、冬季の家畜の飼料に蓄え

に準備する作業中に、監視兵が駆け寄り大声で、お前たちはダモイ（帰国）と叫んでいる。私たちは欺かれ続けたが、これが本物であればと疑心を抱きながら急いで帰る。

列車に乗り一週間も走り、ハバロフスク市に下車した。石造の大きな建物が連立し町の広場には銅像が並び、きれいな都市で、海軍の兵士があふれていた。この地に二、三日滞在し、最終集結地ナホトカまで五日間の列車の旅が続く。走行する列車からカタカタン、カタカタンとレールの離ぎ目から発する音が小気味よく耳に伝わる。今までソ連兵には何度もだまされてきたが、今度こそ本当に帰れそうな気がして心が騒いだ。とうとう最終集結地ナホトカに到着、安堵する。迎える船が来るまでに第一から第三収容所を経て、多様な検問を通過してはじめて帰国が許され、その関門が私にとって身分が暴露されるのではと心配があったが、無事に帰国ができた。その夜は海岸の砂浜での仮宿であったが、海に手を入れこの海水が祖国日本に続いているのかと思うと、たまらなくうれしくて涙がとまら

なかった。よくも私の体が無事に今まで持ちこたえてくれたものと、改めて神仏の加護のおかげと感謝しました。

シベリア抑留の思い出（その3）

翌日ナホトカ第一收容所に入所し、ここでは作業はなく、検査があるだけで何もすることなしで、図書館に行ってみると日本では発禁の小林多喜治の「蟹工船」や「非常線」等の共産党関係の図書が所狭しと並んでいた。理容室に行き散髪を済ませ外に出てみると、珍しいことに日本女性に会う。話しかけて聞いてみると、従軍看護婦で満州で捕虜になったと申し、故国には帰らず、ソ連で共産党の勉強をするのだと、話してくれた。私は改めて洗脳の恐ろしさを覚え、完全に赤に染まった彼女に哀れみを感じた。やがて第二、三の收容所を経て、病院船高砂丸が入港し、いざ乗船と決まり、一列になり、黒い襟章を付けたゲーペーウーの士官二人が来て、我々の顔を一人ずつ凝視しながら立ちどまり、氏名を確認し、前職が運転手、神官等が乗船を拒否され隔離された。船上タラップには看護婦が手を振

って、ご苦労さまと迎えてくれた。スピーカーから懐かしい赤城の子守り歌のメロデーが流れていた。乗船すると船は岸壁を離れ、もうここにはロシア人の姿はなく、船内スピーカーから、兵隊さん長い間大変ご苦労さまでした。今まで身分をいつわったりしていた人は、もう大丈夫ですから本当のことをローマ字で書いてください、と紙片が渡された。隣に座っていた兵隊が、私は特務機関員と申し替えた。また、そばにいた兵隊が、私に、班長自分はローマ字が書けないので帰省先と氏名を書いて欲しいと申し出、快く引き受けた。船内の畳は黄ばみ少々汚れていたが、何年かぶりで大の字になりにくつろいだ間もなく、昼食のハヤシライスが大盛りで出され、久しぶりで満腹感を覚えた。鈍足であったが、一昼夜過ごし東舞鶴港に接岸、松の緑が目にしみるような感じがした。

シベリアでモグラを食べた話

昭和二十年十月二十三日、私たち軍人は、戦時捕虜として北海道に返すという言葉にだまされて、ソ連の一万トン級の油送船に乗船、着いたところは流刑地イ

ルクーツク地区に抑留され、夏季は鉄道工事、建築大工、道路工事、屋根まさふき、国営農場作業。冬季は伐採作業に狩り出され、食糧は米の飯は全くなしで馬と一緒に、コウリヤン、大豆、エン麦、ヒエ、そば等が主食で、しかもカーシャ（かゆ）が飯盒のふたすれすれの量に、馬鈴薯が皮のまま少量入った岩塩のスープのわずかな食糧で、常時空腹状態で、便所のそばに落ちて一切のパンまで拾って食べたような飢餓状況の中で、酷使され、まさに生き地獄のような生活が毎日続き、栄養失調でともしびが消えるように、数多くの戦友が死んでいった。また、冬季は伐採作業で、未経験だけに苦勞も多く、防寒着を着用で倒れて来る大木を避け切れずに、下敷きで死んだ友も数人おりました。死人はトロッコで運ばれ、死体置き場に送られた光景は、今でも私のまぶたの奥に焼きつくように残っており、まことに悲惨なものであった。昭和二十一年二月、私たちが伐採作業の昼食時、斜面の針葉樹林の中でたき火を囲んで昼食中、私の座っている大樹の根株より、たき火で暖かくなったあたりの雰囲気を、

春がやって来たと勘違いしてか、根株の雪をかきわけ、一匹のモグラが顔を出した。目ざとく見つけた私は瞬間的に素手でつかみ取り、手元の小枝に串刺しにして、たき火で毛を焼き払い、内臓も取らず飯盒のスープの中に入れて煮込む、スープは途端に油がキラキラと浮き、馬鈴薯だけの汁は、肉入りスープに変わった。それを頭からガリガリとかじりつき、そのおいしかった味は今でも忘れずに、またあたりの兵隊たちのうらやましように私を見つめている目が想い出される。これもシベリアでの飢餓状態での生活の一コマである。

シベリアで見たユダヤ人たち

昭和二十一年九月、私たち捕虜は、コムソムモリスク市郊外の小高い丘の収容所に五百人ほど軽作業に、街で側溝を掘ったり、近くのコルホーズに狩り出され、飛行場のような広範な農地にて、雑草の繁茂したニンジン畑の除草作業に使役した。ニンジン、雑草の区別の判別が困難な状態でなかなか能率が上がらず、はいつくばっての作業で間違えて引き抜いたニンジンをか

じりながら、一畝片づけたら早くも昼で、昼食後折り返し、また一畝で、作業終了の五時で一日に二畝がやっとの作業行程である。ソ連農業は大規模農業で大型機械使用で、しかも共産主義ゆえ、日本人が考えるのと違いすべてにおいて愛着心に欠けており、種まき後は放置したままで、雑草も伸びほうだいで除草に苦慮するのも当然である。

ある日の午後、別の空き収容所に見なれぬ団体が監視兵に囲まれてやってきた。みな四十過ぎの男女でソ連人と違い一様に立派な服装が目についた。毛皮の立派なコートに身を包み大きなトランクを両手に抱え、中には金縁めがねをかけている者もあり、裕福そうに見えた。監視兵に聞くとユダヤ人だと答えた。ドイツの目を逃れてシベリアまで放浪してきたのか、我々と同じ抑留の身であろうか、みな一様におびえたうつろな目が今でも残っている。

翼が欲しかった

これもシベリア抑留の思い出の一つで、終戦の翌年秋、最初上陸地ソフガワニで鉄道工事作業で、極寒、

極度の食糧不足、強制労働で二十一年春を迎えるまでに栄養失調で極度に体調を崩し、収容所の一割近い人命が灯が消えるようにあつけなく死んでいった。私も寒さによる急性感冒にかかり、とまらぬせきと一緒に血を吐き、翌日軍医の診断を受け、保養ラーゲルに収容され命拾いをした。

春の訪れとともに体力も回復し、身体検査で軽作業収容所に回され、その後三日間ほど貨車に揺られて数百キロ西方のムーリンという山中で鉄道工事に従事していた。夏になって赤十字経由で出した郵便の返事が祖国から届き、壁新聞に展示された。中には南方戦線から帰って来た兵隊もいると知り、おれたちはいつになつたら帰国できるのか、全くわからない。ソ連兵にはだまされ続きで明日のことさえ不明である。夜中に砂利満載の貨車が到着したと警備兵にたたき起こされ、砂利降ろし作業を強いられたり嫌なことが続いた。シベリアの秋の訪れは早く、月夜には、渡り鳥が列をなして南の方向に飛んで行く様子を見るたびに、おれたちも翼があつたら日本に帰ることができるのにと何

度も思ったことか。祖国の状況は全くわからない。共產党発行の日本新聞では、現在日本では失業者が街にあふれ、ボタン大の菓子が一十円で食糧難が続いていると報道していた。それに増し我々の給与は米などを見たことなしで、毎日食べているものは馬と一緒、エン麦、アワ、ヒエ、コウリヤン、そばのカーシヤ（かゆ）が飯盒のふたに一杯だけで、馬鈴薯の入った岩塩の鏡汁だけが唯一の食糧であった。

同胞の鎮魂を念じ

新潟県 生 越 昇

昭和二十年八月十七日陣地出發、翌十八日午後零時、図們的鐵道官舎地内において武装解除受く。二十一日午後、將校と我々伝令數十人の兵士が延吉の師団司令部に收容されるべく図們的の駅に向かった。駅には負傷した將兵が担架で運ばれ、顔など全くわからない状況。傷口には虫がわいて悲惨な姿で、「殺してくれ」と叫

んでいる兵士もいる。我々も、精神状態が正常でないであろうか、ただ黙って見守っているだけである。

当日延吉の師団司令部に收容され、翌二十二日午前司令部を出發、同日延吉の厩舎において山本兵長以下數十人の我々伝令兵がこの日より重砲隊の渡辺隊に属した。九月十二日厩舎を出發。いよいよ日本に帰るということで不安の中にも喜んでいた。だが、これから数年間「ヤポンスキートウキョウダモイ」でだまされ続けられるのである。

ソ満国境ボシエツトを経て八日間の行軍で、九月十日九日クラスキー到着。テント生活が始まった。この丘には一万前後の兵士がテント生活で日本に帰る願番待ちのような氣でいた。ある日、列車の中でシャワー浴をさせられた。いよいよ帰国と思って、駄ばらを吹いて喜んで十月四日貨車に乗せられたのが最後、シベリア地獄行きとなる。

走行中の貨車の中は、体からの湿氣の霜で真つ白く冷蔵庫さながらだ。入り口付近などはつららが下がり、寒さのため、貨車の隅の方に病人を寝かせていたがど